

元中央大学職員の

世界放浪

3

石井誠啓

Masayoshi Ishii



僕が見た中東問題

中米のパナマからチリに飛び、アルゼンチン、ブラジル、ベネズエラ、そしてコロンビアを旅しました。コロンビアというとゲリラとかコカインといった危険なイメージですが、

実際に旅してみると、特に危険を感じることとはなく、それどころか面白いし、居心地のいい国でした。

イスラムの国々（イラン、パキスタン、シリア、ヨルダン、スーダンなど）を旅したときもそうでした。イスラムというイメージがあまりませんが、実際に僕が出会ったイスラムの人々は人なつこく、なん

でそんなに親切なの？ けっこう親切でした。それは日本人、欧米人以上かもしれない。

旅を通じて知ったことは、イメージと実際は違うものであり、その土地に行ってみて、初めて知ることが多いということです。

お前はレッド・アミーカ

常に新聞やテレビで話題になっている中東問題。遠い国で起きていることだと思っていた。自分には関係ないや。だからニュースで聞いても、ふーんそうなんだ、とただそのまま受け入れていた。今回、自分の目で見えたことは「実感」となり、ああこれが中東問題かと自分なりに

解釈した。

レバノンの首都ベイルート、中東においてこの町は異色だ。美しい地中海に面し、海岸沿いを優雅に散歩やジョギングするレバノン人、おしゃれなカフェを見かける。ここは本当に中東か？ まるでヨーロッパのどこの町にいる感覚だ。

そんな華やかな町の中心にサブラシャティーラと呼ばれるパレスチナ難民地区がある。いわゆるスラムで、パレスチナ人だけでなく低所得層のレバノン人なども住んでいる。ここは洗練された海岸通りとは対照的だ。狭い通りに商店や屋台が建ち並び、ひしめく人、人、人。ゴミは散乱し、建物は崩壊気味。テントを

ちよつとだけマシにした家や、内戦でボロボロになって以来そのままの建物に人々は住んでいる。同じ1つの都市の中にこうまで極端に違う生活環境が存在することに愕然とした。見た目とは裏腹に活気があるのであまり悲惨には見えない。路地を歩いていたらブレハブのような家からおっちゃんたちが手招きしてくれた。水タバコとチャイをごちそうになる。外の空き地に出ると子どもたち群がってくる。ほとんどはただの好奇心だが、中にはお金を要求してくる子、さりげなく僕のバッグを開けようとする子がいる。そこにいたパレスチナ人のおじいちゃんがいる。はこの子達はジプシーとのこと。おじいちゃんに「おまえはレッドアミーカか？」って言われ、それなら「レッドクロス(赤十字)でしょ」って思ったが、あとで考えてみると日本赤軍を意味していたのかもしれない。レバノンには日本赤軍の拠点だったそうだけど、日本赤軍のメンバーがこのあたりに隠れていたのかもしれない。まさかねえ？



パレスチナ人の子供たち。ちょっと学校を覗いたら笑顔で校門へ出てきた（ヨルダン川西岸地区カリキリヤ）

難民キャンプでNGO活動をしているパレスチナ人は「ライトや電気、家などのインフラがこんなに不十分なのにレバノン政府は助けしてくれない。狭い家に何人もが一緒に住まないといけない」と嘆く。彼らはパレスチナ女性がつくった伝統的な模様のグッズを売り、その収入を生活向上に当てている。話の中でイ

スラエルへの強い憎しみ、自分たちの本来の土地への執着を感じた。「もしあなたが日本を追い出され、違う土地で生活してたら取り戻したいでしょ？」

アフマッド少年の「コロコロ」

難民地区を歩いていたとき、10歳前後の少年アフマッドに出会った。

いきなりコーラを買ってきてくれて、しかもお金を受け取るうとしない。小さいのになんて気がいいんだ。彼の家に招待され、食事をごちそうになる。陽気なお母さん、おばあちゃんもてなしてくれる。おばあちゃんがなんだかわからない歌をアラビア語で歌ってくれたとき、僕はなんだかわから

ない感情になり目が潤んだ。僕にも日本語の歌を歌ってくれというので、「上を向いて歩こう」「明日があるさ」を歌った。ウケは悪くない。いつもこういうとき何を歌おうか迷う。「さくらさくら」とかじゃ暗くなるし、日本の伝統的な歌で明るい歌って案外思いつかない。

外見はみずぼらしい家だったが、中はきれいだしそれほど貧しいという印象は受けなかった。アフマッドとはサッカーをしたり、キックボクシングを教えてあげたりしたら大喜び。「愛してる。明日も来て来て」と抱きついてくるので、翌日も行かないわけにはいかなかった。結局この日から3日間、この家とその親戚の家を訪れることになったが、とにかく陽気な家族だった。

笑顔で元気いっぱいのアフマッドは何度も何度もほっぺをつけてキスしてくれる。12歳の女の子がテンポのいい音楽をバックに、アラブの踊りを披露してくれる。その踊りに加わるこれまた元気なおばあちゃん。みんな手で拍子をして盛り上げる。

一緒に踊り、歌う。家族の一体感、あたたかさが伝わってきた。それは最も大事なものはないだろうか。日本は物質的には彼らの何倍も豊かだけど、この家族のような愛を備えた豊かさだろうか。

そんな陽気な家族も、ことアメリカとイスラエルの話になると憎悪をむきだしにした。アフマッドがおもちゃの機関銃を持ってきてイスラエルへ向かって、乱射するふりをする。それをはやしたてる家族。何とも悲しい気持ちになってしまった。

1982年イスラエルがベイルトに侵攻したとき、この地区で2000-3000人もの人々が虐殺された。虐殺現場には当時の写真が大きく展示してある。PLO（パレスチナ解放機構）撲滅のため侵攻してきたイスラエル軍はレバノンのキリスト教徒と手を組み虐殺に及んだ。指揮していたのは当時のイスラエル国防相シヤロン（前イスラエル首相）だった。

僕らはテレビで流れてくるニュースを見て、「もういいじゃん、いい

かげんに戦争なんかやめて平和になるうよ」って口にする。しかし、家族、友人を殺された当事者の恨みはそう簡単に抑えられるものではない。もし自分がその立場のときに果たして許せるだろうか？

敵対心の根は深く、中東和平の道ははるか遠いのもかもしれないと、僕はこのとき思った。

イスラエル、パレスチナ人自治区を訪ねて

ヨルダンのアンマンにいたとき、日本人が集まるクリフホテルで、ある日本人ジャーナリストに出会った。テレビや雑誌で活躍中の人だ。ちょうどイラクへの自衛隊派遣が決定されたときで、これからイラクへ取材に向かうという。この人は戦争を知っている人。それを伝えようとしている人。「ところかまわず旅行する日本人をどう思いますか？」と聞いてみた。「どんどん行くべきです」。世界に流れるメディアの情報と実際の違いを感じますか？「はい。明らかな情報操作を感じるときがあり

ます」

イラク戦争終了後から自衛隊派遣という緊迫した状況をむかえる前まで、イラクへは普通に日本人旅行者が出入りしていた。クリフホテルの情報ノートには、ただイラクに観光にくる日本人は現地のイラク人に評判が悪いとあった。それに対し、韓国人はボランティア目的で来るので歓迎されているとも。

現地で活動している日本人ボランティアに会ったある日本人旅行者は、「迷惑だから遊び半分で来ないで」って怒られたという。万が一のことが日本人にあった場合、彼らの活動がしづらくなるって。この人はその後、武装グループに捕まり、人質となった。直接聞いたわけではないが、彼女は自分の私財で、危険なアンマンとバグダット間を往復し、アメリカ軍の劣化ウラン弾によって白血病になってしまった子供たちに薬を届けていたんだとか。日本の世論は冷たかった。でも、そういう人道支援によって助けられていた人々がいたんだという事実もあるという

こと。

旅行者の間でも意見は分かれていた。戦後でテロが続く、人々の生活や心が不安定なときに訪れるべきではないという意見と、少しでも自分の目で見てその状況の過酷さや悲惨さを知り伝えていくべきだという意見。僕は真実を知りたいと思った。自分の目で見たいと。が、結局行けなかった。時期が悪かったし、怖かった。自分が傷つくのも怖い、日本で待ってる人が傷つくのはもっと怖いと思った。常識的な行動さえしていればイスラエルは危険じゃない。イラクへは行けないがせめてイスラエルはこの目で見てやろうってそのとき思った。

「分離壁」反対デモ 対催涙弾用玉ネギを手

エルサレムの郊外、生まれて初めてデモ行進に参加した。この国で何が起きてるか知りたかったから。イスラエルが建設している分離壁に反対するパレスチナ人のデモ。このときイスラエルが自衛のためと主張す

る分離壁がパレスチナ人自治区のヨルダン川西岸地区内に建設されつつあった。パレスチナ人、外国人含め約1000人が集まった。その中にパレスチナ人に味方するイスラエル人が約半数近くもいたというから、これは和平への希望だ。

「壁反対」や「平和」と書かれたプラカードや旗を持つ人々には、思ったほど緊張感はなく、行進しながら笑顔も見えた。日本人の僕に対しても友好的だった。

デモ参加前には対催涙弾用の玉ネギを1人1人持たされた。もし催涙弾をくらったら、玉ネギをつぶして口に含むとその効果を減らせるんだとか。ほんとかなあ？ 実際にはイスラエル側からの弾圧は何もなくほっとした。救急車が数台待機していたのを見ると、そういう可能性はあったわけだ。デモは何度も行われているようだったが、イスラエルに對してどのくらい効果があるのかわからない。国際司法裁判所の警告を受けても無視して建設を続けていたイスラエルである。



イスラエル政府の分離壁建設に反対するパレスチナ人たちのデモ（エルサレム郊外）

ガザは入れないと聞いたので行かなかった。イスラエルの弾圧がもつとも激しく、特にガザ南部のラファがひどいと聞いた。イスラエル軍はもつとも貧しい人たちをさらに苦しめている。そこでボランティア活動をしていた23歳のアメリカ人女性がイスラエル軍のブルドーザーに轢かれて亡くなった。また子供を救い出そうとしたイギリス人男性はイスラエル兵に頭を撃たれて植物人間になった。現在ではイスラ

エル軍はガザを撤退したが、当時のイスラエル政府は9月11日以降のテロ撲滅の追い風にのり、ガザに対し攻撃的に圧力をかけていた。ガザ地区の人々の生活環境はひどいものらしく、たとえ国連機関UNDPが新しい建物を建設し、インフラを整備してもイスラエル軍が破壊してしまうという。イスラエルの戦車に対し、投石で抵抗する子供の写真が印象的だった。

ラマラは故アラファト議長が住んでいた町。残念ながら本人には会えなかったが、ここが大統領府なの？って疑うくらい建物の破壊されぶりは凄まじく、放置されていた。何かパレスチナ側がイスラエルに対して事件を起こすと、故アラファトの責任にされ、イスラエル軍が嫌がらせにやってくる。彼が一応パレスチナ側の代表ということになっているが、実際にはパレスチナ人の中にもいろんなグループ、過激派などがいて彼の手に負えなかったという。ラマラも含め、パレスチナ人自治区の時に入るときはイスラエル軍兵士による検問がある。外国人はパスポート、パレスチナ人は身分証明書とそのつど提示しなくてはならない。同じ国でありながら武器を持った一方がもう一方を管理している現状。有刺鉄線やフェンスで区切られた境界線。検問を待つ車や人の列。自分の町なのに自由に出入りすることができないパレスチナ人。こんなことが今の時代にあるなんて……。出会った日本人のおばちゃんはこの光景を目にしたとき、涙がでたと言っていた。

救急搬送ベッドも検問

エルサレムで泊まっていた宿が偶然にもISM (International Solidarity Movement) の活動家たちの拠点だった。ISMはパレスチナのためにデモや抗議活動をしたり、フェンスを取り除いたりする外国人ボランティア団体のこと。

飛び入りでミーティングに参加させてもらい、カリキリヤという分離壁に囲まれた町に一緒に行かせてもらうことになった。このときのメン

デモのときに偶然会った元国連職員、朝日新聞駐在員、NGO職員、東大助手らと5時間にわたって中東問題について討論した。知識を深めることができ、有意義な時間となったが、たまに日本語なのに話についていけなかった。己の無知さを痛感した。「その国を訪れるなら、その国のことを勉強してから訪れるべき

だ」と言っていたある旅行者の言葉が胸に響いた。

無惨なアラファト議長の町

外国人旅行者が入れないパレスチナ自治区がある。そのときの状況によって流動的だが、キリストが生まれた地ベツレヘムについてはまず問題ない。

ガザは入れないと聞いたので行かなかった。イスラエルの弾圧がもつとも激しく、特にガザ南部のラファがひどいと聞いた。イスラエル軍はもつとも貧しい人たちをさらに苦しめている。そこでボランティア活動をしていた23歳のアメリカ人女性がイスラエル軍のブルドーザーに轢かれて亡くなった。また子供を救い出そうとしたイギリス人男性はイスラエル兵に頭を撃たれて植物人間になった。現在ではイスラ



ヨルダン川西岸地区ナブルス市で検問する若いイスラエル人兵士（ヨルダン川西岸地区ナブルス市）

入れてもらえない。「カリキリヤの住民以外はダメだ！」とイスラエル兵に止められる。イスラエル人人権団体の人たちにも伝えてみたが、何もできないう。彼らはパレスチナ人に対して何か問題が起ったときに対応する団体でパレスチナ人の味方だ。こういう団体が存在するのが嬉しかったし、何か安心した。イスラエル人すべてが国の政策を支持してるわけではない。

バーは日本人3人、アイスランド人2人、スウェーデン人とアメリカ人アイスランド人の女の子2人はまだ20歳でこれが初の海外旅行だという。この若さで参加してるのもそうだが、初めての海外での時間とお金をボラントエア、しかも危険があるかもしれない活動に費やすことに驚かされた。普通は南の島やショッピングに精を出す年頃だろうに。

しばらくその場で粘ったが今日はあきらめ、また明日再チャレンジすることになった。悔しかったんでせめて写真をとドキドキしながら隠し撮りしてたとき、小さな女の子がベッドに乗せられたまま運ばれてきた。何やら緊急の様子なのに、その子はカリキリヤに住んでいないので中にいれてもらえず、検問所付近に医者や兵士が集まって対応していた。必死に助けようとする様子は伝わってきたが、そんなときでも町に入れないという徹底した現実を知った。

翌日はなぜかまったく問題なく通過でき、町の西側を囲んでいる分離壁を見に行った。高さ8メートルの壁で監視カメラが一定間隔ごとに配置されている。いくつかある監視塔には兵士がいて四六時中見張っている。写真を撮ろうとしたら怒鳴られた。電気フェンスや分離壁によって町が囲まれたことにより、壁の向こう側に職場があった人はもうそこへ行つて働くことはできなくなった。町が静かなのはそういう状況にもよるのだろう。こんな環境で住民は生活していかなくてはならない。壁に書かれた落書き「くそつたれ壁!」「パレスチナに自由を!」に彼らの思いが込められている。こんなところ存在しちゃいけない。刑務所か強制収容所だよ、これじゃあ。



分離壁には、パレスチナ人の怒りの文字（カリキリヤ）

なかった。すぐ近くで発砲を聞いたときはマジでビビった（人に向けてられたものではないはず）。彼らはファタハで、住民に奮起を促してるらしい。

次の日はISMメンバーたちと別れ、日本人3人でナブルスへ向かった。場所がよくわからず、タクシーを2度乗り継ぎ、歩いたりしてようやく町の入口らしきところが見えた。正規の入口じゃないのか検問所はなく、

戦車一台とイスラエル兵数人が道の真ん中をふさいでいる。一瞬、緊張が走った。やばい、通過できるのか？すると、こんなところに日本人旅行者がいるのは珍しいって、なんとイスラエル兵士達に記念撮影されてしまった。ナブルスに行くのは危険、「ハマス」や「ジハード」といったパレスチナ人グループが爆弾を持っていると脅されたが、通過はさせてくれた。町に入ってから知ったのだが、この日の朝4時、イスラエルとパレスチナ人との間で戦闘があり、4人のパレスチナ人が亡くなった。11時には大規模なデモ行進があったことを知った。僕らがナブルスに到着したのが13時。町に特に目立った様子はなかった。

イスラエルを旅するのにエルサレムやテルアビブならほぼ問題ないだろうが、パレスチナ人自治区をまわるときは事前情報が必要。危険度は流動的に変化する。

日本にいたときの僕の意見は中東問題に関しては中立的立場だった。ニュースで「イスラエル人がパレス

チナ人に殺されました。パレスチナ人の報復自爆テロで○人のイスラエル人が犠牲になりました」と聞かされた、ケンカ両成敗だなんて思ってた。が、実際訪れたことにより、パレスチナに同情するようになった。圧倒的に力を持っているのはイスラエルだと思う。弱いものいじめにも感じられた。

やられたらやりかえすという復讐を肯定するつもりはないが、武器を持たないパレスチナ人は自爆テロという行為でしか抵抗できない。それほどまで追い詰められてるってこと。また、パレスチナ人による自爆テロのニュースを大きく報道するが実際にそう頻繁に起こっているものではない。アメリカはイスラエル寄りなので日本に入ってくるニュースはイスラエルに同情するものが多いと思われる。

不思議なのは第2次世界大戦時にホロコーストにより600万人が殺され、迫害されてきたという歴史をもつユダヤ人がなぜ迫害する側に立てるのか？僕は中東問題の詳しい

ことは知らない。でも、こう思うのだ。圧倒的な力を持つイスラエル側がもっと譲歩すべきではないだろうか、と。

どっぞ、平和ボケの日本へ

旅先で出会ったイスラエル人は気さくに話せる奴が多かった。一般的にはイスラエル人旅行者は嫌われているが、僕の彼らに対する印象は悪

くない。

彼らは高校卒業後、男女とも2年以上の徴兵を課される。18歳という若さでは国への義務、任務を的確に遂行することがすべてと考える者もいるだろう。兵役後は海外を旅する者も少なくない。インドなんかでは特に彼らをよく見かける。海外へと旅立っていくイスラエル人たちが視野を広げ、戦争の空しさを知り、自国を変えていく原動力となっていくけばと、僕は思う。平和を望むイスラエル人だっているんだ。

聖墳墓教会の中。かつてここゴルゴダの丘でキリストは磔にされた（エルサレム）

イスラエルに数年住んでいたことがあり、中東情勢に詳しい日本人が言っていた。「中東問題を解決するには、イスラエル、パレスチナ双方のお偉いさんを日本に連れて行けばいい。この平和ボケした日本を見れば、戦争なんてバカバカしくてやってられないって思うかもね。ハハハ」なるほどね。

